

# 越前、淡路、下野旅行瑣談

文學博士 井上哲次郎

殊更お話するといふ程のこともありませぬが、夏休に少し旅行致しまして神社などに参拜致しましたので、幾らか神道に關係のある話があるから、其等のことで宜しければお話致しませうと申した所が、それで宜しいからといふので、そこで鳥居君の講演を聴くのを主として今晚参つたやうな次第であります。一向御参考になるやうなこともなからうと思ひますけれども、折角の御依頼でありますから旅行中の感想を取纏めてお話致します。尤も宅においでになつた方には少しお話致しましたけれども順序的に申上げます。

此夏私が旅行したのは僅の日數でありました。初敦賀に行きました。今年は一體何處にも行かぬ積りでありましたけれども、敦賀から講習會に是非來て呉れと云つて來た。避暑に好いから避暑旁々來て呉れと云ふことでありまして、それならば行かうと云ふので参りました。敦賀は嘗て一二回通抜けたこと

はありますが、たゞ汽車で通抜けたのみで、降りて見たことはなかつた。今度初めて行つて一週間ばかり居りました。乃木大將が先年英國戴冠式からお歸りになられた時に、敦賀の話がありました、どうも彼處は停車場から街が遠いので不便である。外國人などに對してもあゝいふことでは甚だいかぬと云ふ話を聞きました。今度行つて見ました處が、成程停車場から遠い、約半道あるかと思はれる。併し港はなか／＼立派な港であります。唯々規模が稍々小さいと云ふ缺點はあるが、景色などは極めて好い。今築港の工事が小規模ながら出來て居ります。

それは兎に角として、私は一週間居る間に、講習會の傍らあの附近の主なる神社に參拜致しました。先づ最初に氣比神宮に詣りました。官幣大社でありまして、實に立派な社であります。松の樹などは随分立派な樹があります。以前はなか／＼松が多かつたが暴風の爲めに大分倒れたさうで、老木は少なくなつて稚木が多い。併しまた／＼立派な老木が何本か残つてゐて社の風景も其爲めに好いのであります。氣比神宮の神様は今では御食津大神であると云ふことを申して居りますが、どうも然うではなからうと私などは思ふ。もと／＼伊奢沙別命を祀つてある。その神様の素性に就いては能く分らぬので、行く前に萩野君や松本愛重君などに話したことがあります。松本君は、或は天日槍であらうと云つて居りました。固より臆測でありませう。萩野君は矢張り日本の神様であらう別オ伊奢沙別命と云ふことがあるから何うしても日本の神様であらうと云はれました。私も其後一向調べて見ませぬ、又調べ様も餘りないので

あります。あの社には仲哀帝・神功皇后其他の神々を一緒に祀つてあります。菅公が朝廷の御使として二回ほど行かれたと云ふことでありまして、菅公の遺蹟も傳へられて居ります。④

それから金ヶ崎神宮も立派な社でありまして、殊に景色の良い處を擇んで社を造つてあります。海岸に突出した眺望の好い處に在ります。是れは尊良、恒良兩親王の靈を祀つた處でありまして、初めて神社を建てたのは明治年間であつたと思ひます。其後櫻を澤山植ゑまして、花の期節には餘程景色が好く櫻の名所と云つても宜い位であると云ふことを聞きましたが、行つて見ると、成程櫻が餘程植ゑてあります。松原公園に松原神社と云ふのがあります。武田耕雲齋並に其部下の者三百餘人が此松原で斬られて、其斬られた處に神社を建てたのであります。私の行きました時は丁度修繕をして居りました。此處ではいろいろ耕雲齋の遺蹟について話がありました。其外には、寺なども豫想しないやうな立派な時宗の寺がありました。來迎寺、西福寺などと云ふのは國寶があつて餘程大きな寺でありました。庭の如きも自然の景を庭の景に應用してなかく珍しい庭であります。其寺は夜戸を閉めないと云ふことです。唯々入口だけ一ヶ處閉めて、あとは皆障子だけである。それが寺の特色とも見えますが、併し大分邊鄙であるから其處まで盗みに行く奴はなからう。けれども段々開けるからしてあの儘では長くは續かぬであらうと思ふ。國寶などもあるから随分あぶない。近い内には戸を閉める様にしなければらぬと思ひました。

一日港を横ぎつて向岸の常宮と云ふ處に行きました。島ではない、陸続きであるから陸を通つても行けますけれども、船の方が早いからと云ふので講習員一同と共に船に乗つて遊びに行きました。常宮は餘程珍しい處でありました。第一景色が好い。白砂青松で、さうして海水浴に適して居る。龍燈の松と稱するのがあります、龍が来て夜燈火を點けると言傳へてあります。日本海方面に二ヶ處あると云ふが、其一ヶ處が是れでありまして、餘程の老木が一本あります。常宮の社は延喜式の神名帳にも出て居りますが、天八百萬比咩命といふ神様であると云ふことであります。是れは一つ山本さんに謂れを聞きたいと思ひますが、どうも一人の神様で八百萬といふのは随分慾張つたやうに思はれる。或は昔大勢の女の神様を葬つて社を建てたのではないかと私は想像しました。延喜式にあつても、どうも延喜式は悉く信する譯には往かぬのであります。

茲に特に諸君にお話したいと思ひますのは、私も大變珍しく感じましたが、産家と稱するものがあります。産家は他の地方にも少しはありますけれども、此處には純然たる古風の産家が造つて居ります。私は講習會で日本の國民性を論ずるに當りまして、往昔日本では、お産をするには産家があつたし又死人を置くには喪家があつたと云ふことを例に出しました。丁度常宮の神官が講習會員でありまして、其の神官がいろ／＼見せて呉れましたが、講義の中にあつた産家が此土地にもあると云ふことを話しました。其時は講習會の幹部の人々も皆來て居りましたが、其等の土地の人でさへ其處に産家のあることは

知らなかつた。そこで、それは一つ見たいが見られるだらうかと云ふと、男は見ることはならぬと云ふ。けれども、何とかして見せて呉れないかと、皆好奇心に驅られて、是非見たいと云ふ話になりましたが何しろ、男は其處に這入ることはならぬ、併し遠くからなら宜からうと云ふことになりました。神官の説明に依りますれば、其處は約三十戸許りの村であつて、其村の共同の産家である。村の女がお産をする時には皆其處へ行つてお産をする、外の處でお産することはならぬと云ふことになつて居る。或人が其神官に問ひまして、第一君の細君などは何うするか、やはり其處へ行つてやるかと云つたら、率先してやる。其處へ這入つてお産をすると申しました。それから愈々行つて見やうと云ふので、神官が真先に立つて案内しました。丁度村の真中邊りに藁葺の家が一棟ありまして、彼處だと云ふので、入口が少し開いて居りましたからして、少し隔つて見たのであります。床はない。床はなくして、砂の上でお産をする。さうして中は三四人位しか這入れない様子である。あれ位の廣さで宜いだらうか、かちあつた時には何うするかと云ふ話が出ました。けれども僅三十戸位の村であるから、さう大勢かちあふことはない。二人か三人來ることはあつても、其位は這入れるから矢張り其處で一緒にお産をすると云ふことであります。砂の上でするので、汚れた砂は取替へる。海岸で幾らでも砂はあるから都合が好い。それからお産をした後に家へ歸つて來るには必ず一度海水に浴して身を淨めて歸るといふ習慣になつて居る。此等は餘程古風であると思ひました。

産家の續きにもう一ヶ處入口が見えて、釜が幾つもある。それは村内の女が月水の時の其處に這入つて御飯を食へる處だと云ひました。平生は自分の家に居つて宜いけれども、御飯を食へる時には其處に行つて食へる。是れも餘程古風であります。それで段々話の中に斯う云ふことが出ました。あれは今建替へやうといふ話があるが、建替へたならば古風が失せて了ふであらう、今の處では純然たる古風が残存して居るが建替へて床などを拵へてしまつたら古風が抜けるから面白くない。斯う云ふ話がありました。兎に角餘程珍らしいもので土地の者さへ知らなかつた。斯う云ふものがあつたかと皆驚いて居つた位であります。何しろ常宮の在る處は所謂仙境で餘程古風を存して居るやうに思はれました。

敦賀に一週間居りました、それで歸る筈でありました處が、淡路島に一寸立寄ることになりました。實は昨年淡路島からして講演に来て呉れと依頼がありました、昨年は明治天皇の崩御其他さまざまの事があつて行かれなかつた。今年も、私は何處にも行かぬ積りでありましたから、寛博士が行かれることになつて居りました。然るに寛博士が急に大腸加答兒をやられて片瀬の方に養生に行かれましたので、淡路島に行くことが急にむづかしくなつて電報で斷はられた。そこで又私の方に淡路島から電報を以て何とか工夫はなからうかと云つて來ました。さういふ次第からして餘儀なく歸りに寄つたのであります。

淡路島には豫て私は行きたいと思つて居りました。彼處には淡路伊佐奈伎神社 ○今は單に伊隣諸神社と稱す がある。又彼の自凝島があると云ふことを嘗て聞て居りまして、好い機會があつたら此伊佐奈伎神社に參拜する

ことゝ礮馭盧島を見ることを一度やつて見たいと思つて居りました。

先づ兵庫から船で参りまして、淡路島の東海岸を沿ふて南に下つて志筑と云ふ處で上陸しました。上陸して先づ伊弉諾神社に詣りました。あれから三里許り奥へ入ると伊弉諾神社があります。官幣大社で、立派な社であります。伊弉諾神社は神社局から出した「神社一覽」で見ると外にもあるけれども、官幣大社はない。實に立派な社であります。宮司の名は一寸忘れましたが、大分何か分る人であります。けれども、社に古文書もなければ古記録もない。あれほど古文書も古記録もないやうな神社は多くない。近頃焼けたのかといふと焼けたのでもない。何うしたのか何もない。神官は入替はつてしまつて故の事は知らぬ。文獻徴するに足らずで、一寸閉口しました。縁起でもあるかと云ふと縁起もない。何もない。一枚摺のものがあつたが、それらはまるで話にならぬ。唯々神社は立派なもので、あんな處に斯様な神社のあることは豫想しなかつた。

暫く其處で話をして今度は洲本に参りまして、其日の午後洲本から礮馭盧島に行つて礮馭盧神社に詣りました。礮馭盧島は淡路島にあるといふことを前から聞いて居りました。随分怪しいやうな感じもするけれども行つて見なければ分らぬから行つて見ました。洲本から礮馭盧神社まで五里あるのです。五里ありますけれども自動車に乗つて一時間半で行けます。本年の七月から自動車を通つて居りまして五里の道程を一時間半で行かれます。人通りの少ない處は疾風の如くに速く走ります。新聞記者とか郡

視學とか、土地の人が四五人一緒に行かれました。

礮取盧神社の在る所は廣い田畝の真中の様な處で、なか／＼風景が好い。小さい丘陵の上にあります。傍に社務所がありまして、其社務所で少し休憩した後、社司が案内して呉れて自凝神社に參拜した。それから礮取盧島の周圍を巡りました。松の樹が大分ありますが、みな妙な形をして居つて、連理の松であると言明して居る。腹が膨れてゐて丁度妊娠（イモヤ）の様な見えるのが多い。一體礮取盧島と云ふのは主として天然鹽です。横の方を掘ると土に鹽が澤山混ざつて居ります。さうして此處の土を持つて行くとお産が軽いといふ信仰があつて、人が段々土を掘つて行く。餘り掘るから圍ひをしてある。それでも持つて行くらしい。私共の行つた時は特別でありまして、神官自身に一攫ほど取つて呉れましたが、見ると結晶して居る。舐ると鹹いと云ふことでありますが、あまり土を舐る譯にも往かぬから舐めなかつた。紙に包んで持つて來ました。其處を礮取盧島と稱するやうになつたのは何時の頃からであらうか。其當時の事を書いた古い寫本などがありまして、それで見ると其處に社を建て、祭つたのは約二百年來のことである。だから餘り古くない。礮取盧島と稱したのはもう少し前からであるかも知らぬけれども、神社となつたのは二百年以來である。或は礮取盧島と云ふのは今の沼島だと云ひます。沼島と云ふのは淡路島の南で僅の距離の處にあるさうです。志賀重昂氏などは二三回行かれたさうであります。不思議な處で、島には沼の跡の様な處がある。それが眞の礮取盧島であると云ふことを徳川時代の學者も謂つて居りま

す。まだ此外にも礮取盧島と稱する處は一ニヶ處あります。繪島と云ふ處がある。繪島と云ふ處は、私  
は行きませぬけれども、餘程好い處ださうですが、其處が礮取盧島であると云ふ。尙ほもう一ヶ處あり  
ました。さういふ具合に數箇所礮取盧島と稱する處があります。けれども沼島の説が最も勢力ある様に  
思はれます。

それから是れも一寸御參考に申しますが、彼處に積小軒同窓會と云ふのがあります。其積小軒同窓會  
から私に講演を依頼したのでありますが、其會は彼處に阿部喜兵衛と云ふ一人の學者があつて、其人を  
中心として出來て居るのです。あの島では大抵阿部喜兵衛の門下生で立派な人が出て居ります。阿部喜  
兵衛は國學者であります。さうして藏書家でありまして、餘程澤山書物を持つて居るさうであります。  
其人があつた土地では一番の學者でありますが、大變喜んで私は二日に亘つて講演致しました。海岸に大  
濱公園と云ふのがあつて白砂青松である。松は老木で、徳川時代に千本の松を植ゑて、一本枯れれば又  
一本植ゑて補つたさうであります。實に立派な公園であります。海も穏かで、遠淺で海水浴に餘程適  
して居る。敦賀の松原公園と好い匹敵と思ひました。松原公園の方は松が稚いが、大濱公園は松が老木  
であつて一層趣味が深いやうに感じました。其處に新しく建てた武徳殿がありまして、其武徳殿で講演  
を致しました。

翌日講演が終はつてから後、洲本の街に沿ふてある三熊山といふのに登りました。是れは公園地にす

るさうであります。なかく景色が好い。三熊山を降りて今度は四州園と云ふ處に行きました。山を降る時分にはもう日が暮れて暗くなりましたが、其内に半月が出て少し明るくなつた。四州園は海水浴にも好し、非常に眺望の佳い處であります。即ち四州を見晴らす譯であるけれども、夜に入つてボンヤリして見晴らすことも出来なかつた。そこで私は詩を作りました。久しく詩は作らなかつたけれども、あまり感じが浮かびましたので車の上でもよつと作つたのであります。其詩は記念の爲めに扇面に書いて遺して來ました。「東亞之光」にも出して置きました。——前に一寸申しますが、私は、磯馭盧島と云ふのは磯馭盧神社の在る處でもなければ、沼島でもなからう、一體に淡路島全體を指して謂つたものであらう。斯う見た方が宜からうといふ考であります。けれども説はいろ／＼になつて居る。それで此詩を作りました。

自凝之島果何邊。太古靈區今尙傳。

日暮未休尋史蹟。三熊山外月如烟。

私は淡路島と云ふ處については神代の關係からして非常に趣味があると思ひました。一體伊弉諾伊弉册二尊の遺蹟は先山であると言傳へられてあるが、元は其先山の上に二尊の遺蹟があつたのである。今は取除いて日蓮宗の寺がある。それが元の遺蹟であると云ふことを土地の物識りが話して居りました。其先山と云ふのは天拜山に似て居りまして、神々しい山です。太古の靈區と云ふたのは主として先山を

指したのであります。そこで私は淡路島といふのは斯う云ふことではなからうかと思ひます。日本紀などにはいろいろに彼處の事が書いてある。先づ諸冊二尊が蛭兒命を御生みになつて、其次に淡路洲を御生みになつたと云ふ説がある。又一説には、眞先に秋津洲を御生みになつて、次に淡路島を御生みになつたとある。一説々々としていろいろあるが、淡路洲を眞生に御生みになつたと云ふ説が確にある。さうして淡路洲を以て胞と爲して豊秋津洲を御生みになつた。それから伊豫だの隠岐だの、いろいろ外の島々を御生みになつた。或は礮馭盧島を以て胞と爲すといふ説も出て居る。いろいろになつて居りますが、此「爲胞」といふことは斯う云ふ意味があるのではないか。淡路洲を本として段々外の島々を御生みになつたと斯う云ふことに見える。礮馭盧島と淡路洲とは同じものである様に思はれます。どうも種々な點から考へると然うらしく思はれる。

神武天皇の御東征は歴史上の事實として餘程明かでありませんが、其以前に、神武天皇の御先祖即ち天神が東の方におゐでになつた時があつたであらう、それが即ち伊弉諾尊の淡路洲にゐらしたことではなからうか。それが皇統の御先祖の東の方にゐらしやつた一番初ではなからうか。さうして以て淡路洲を胞とあるから、淡路洲と云ふ處が他の島々を御生みになつた根據地である。淡路島と云ふのは、行つて見ると、一方には四國があり、一方には中國があり、一方には本土の主なる部分が丁度あの周圍にある。勢力發展をなさるには一番好い土地である。外から攻めやうと云ふには海があつていかぬ。そこ

で先づあの土地にゐらしつて而して後四方に勢力を御伸べになつた。其れが神話の方面で傳へられて居るのではないかと思ひます。磯取蘆島と云ふのは種々な説がありますけれども、即ち淡路島である。淡路島が沼島である。それは小さい島であつて、それを根據として勢力を發展なさるには好い處であつた。穀物も好く出来るし、海産物も無盡藏である。なか／＼好い土地である。今日、日本で一番人口の稠密な處は淡路島である。人口の稠密の所以は分る。第一食物が多い。果物も能く出来る。さうして周圍が海である。且つ氣候が非常に好い。夏は涼しく冬は暖い。なか／＼日本人の居住に適して居る。さう云ふ土地にゐらしつたと云ふことは勢力發展上是れより都合の好いことはない。さうして初はなか／＼勢力扶植も十分に往かなかつたが、神武天皇がゐらしつて、すつかり本當に勢力を扶植なされた。そこで斯う見ちやいかぬだらうと思ふ。初彼處までゐらすつたが、どうも成功なさらないで復た九州の南端にお歸りになつたと云ふが、お歸りになつたと云ふことは判然しないから、先づ前のが第一期で、第二期に至つて十分成功なされた、と。其お歸りになつたと云ふことは言はぬが宜からうと思ふのであります。さう云ふ風な感じが起りました。是れは御批評があれば結構であります。兎に角淡路島と云ふ處は非常に微妙なる感じを私に與へました。

それから歸りましてから一日家に居りまして、今度は宇都宮に行きました。宇都宮もやはり講習會であります。これは國文の講習會でありまして、私には科外講演としてやつて呉れと云はれました。近い

處であるから一夜泊りで行きました。朝早く行きまして、午前に講演を致しました。さうして晩には懇親會をやると云ふことであつた。即ち午後が明いて居る。之れを何かに利用しやうと思つて、行く前から考へて居りました。

私は豫て詣りたいと思つて居りましたのは二宮神社であります。嘗て五十年祭の時に私に來て呉れと云ふことであまりしたが、何うしても行かれませぬで其儘過ぎましたが、今度は好い機會であるから參拜致しました。單に二宮神社に參拜するだけでありませぬ。彼處には二宮尊徳翁の遺著が一千卷あると云ふことを聞いて居りますので、其れを見たいと思つたのであります。それを見なければ二宮の報徳の教を研究したとは云へない、どんなものか見たいと思つた。或人が曰ふに、二宮の遺著は一萬卷あると云ふ。是れは閉口しました。一萬卷を一寸行つて見る譯にも往かぬが、併しまアどんなものか行つて見たいと思ひました。それから講習會の幹部の人に話して其案内を受けて神社に參りました。社務所で休憩して社司といろ／＼話をしましたが、其社司は八十何歳だと云ふことでありました。社司の下に在つて用をして居る人が兩人居りましたが、何れも八十歳以上の老人であつた。ゑらい老人が三人居りました。暫くして神社に詣りました。神社の背ろに二宮尊徳の墓がある。其れに參拜致しました。それからグルツと廻つて右に出て來ますと、丁度社の右手に倉が設けてありまして、之れを報徳文庫と稱する。此倉に二宮尊徳の遺著がある。どうか拜見したいと言つたら開けて呉れました。這入つて見ると二階建の倉

で、下には書物がない。二階に昇がつて見ると二宮の遺書を以て圖書館になつて居る。其圖書を見ると皆大本である、或は薄いのも五十枚位あるかも知らぬ。それが二千五百冊ある。是れには閉口しましたか。どうも二宮尊徳のやうに忙がしい人が二千五百冊の著述をしたと云ふには閉口しました。

何うして其處に其遺著があると云ふに、それは鈴木藤三郎と云ふ人が寫さしたので、その寫させるに五千圓掛かつたさうであります。時日もなか／＼費やしましたので、七人の筆耕が掛かり切りに掛かつて三年費やした。なか／＼大したものである。之れを報徳全書と申します。目錄だけが二冊ありまして、部類別けになつて居ります。考へて見ると殆ど一切經と匹敵するのであります。著述の多い人は日本に幾らもある。徳川時代に在つては、林羅山、山鹿素行、新井白石、貝原益軒、伊藤東涯、平田篤胤などがありますけれど、一人にして數千卷以上のものを書いた人は居らぬ。卷ではない。卷といふと一冊で何巻も寄せてあるが、二千五百卷ではなく、二千五百冊であります。それで以て一つの圖書館を成して居る。丁度私が敦賀に居ります時に岡田良平君から手紙が來て斯う云ふことを傳へられました。二宮尊徳の孫の二宮尊親氏が二宮全書を出版すると云ふことであるから賛成して呉れと云ふことを云つて來ました。それは賛成してやりました。其時はまだ二宮の遺著を見ない時であります。遺著を見て歸つて來てから二宮尊親氏に其出版と云ふのはどんなものかと申しました所が、それは活版で一千頁位のものであると云ふことでありました。全部出版したら大したものであります。其後尊親氏から手紙が別に來まして、

出版する書物の性質に就いて云つて來ました。どうも自分が二宮先生の遺著から拔書して出すのであるが、自分の考で拔書するのであるからなか／＼満足なものは出來まいと思つたが、贊成して下さつて有難いといふ趣意でありました。やはり拔書と云ふことは確かであります。それで私は詩を作りました。餘程感を深うしましたから車の上で詩を作りました。

利用厚生立大功。 農聖吾久慕高風。

二千餘卷存名著。 報德源流豈有窮。

甚だ詰まらないお話であります。夏休み中一寸二週間ばかりの旅行でありまして、其間に少し神道に關係あることもありますから兎に角申上げた次第であります。

本居宣長曰く

凡そよきことは、いかにもいかにも、世に廣まるこそよ  
けれ、ひめかくして、あまねく人にしらせず、己が私物  
にせんとするは、いと心ぎたなきわざなりかし(古事記傳、一)